

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第 卷四十五第

月六年七十和昭

## 論叢

條件統制と需給統制

文學博士 高田保馬

廣域經濟の貿易理論

經濟學博士 谷口吉彦

東亞資源論の課題

經濟學博士 蜷川虎三

葉適の貨幣思想

經濟學士 穂積文雄

## 研究

儲蓄銀行の課題

經濟學士 徳永清行

テニールの歴史觀

經濟學士 出口勇藏

民國に於ける外國銀行の發展

經濟學士 小寺武四郎

## 說苑

支那工業に於ける株式會社企業の位地

經濟學士 岡部利良

## 附錄

彙報

本誌第五十四卷總目次

## テュルゴの歴史觀

出口 勇 藏

## 一

「非歴史的存在」と非難せられる十八世紀の啓蒙時代は一つの新しい歴史觀を生んだ。さうしてヴォルテール・フリードリッヒ大王・ヒューム・ロバートソン・ギボンが光輝ある歴史的创作に於いてこの歴史觀を貫徹した。これらの著述の内には、人類の聯帶と進歩とに關する直觀があらゆる民族と時代との上にその光をそそいでゐる。今やはじめて世界史は、經驗的考察そのものからつくられたところの一つの聯關をえたのである。かくデイルタイは『十八世紀と歴史的世界』のはじめに書いてゐる。十六世紀と十七世紀とは歴史の資料を整理するための科學的な道具を創造した。さうして啓蒙時代に至つて此資料を支配しうる偉大な *leitende Ideen* がつくられて、世界史ははじめて神學のくびきから離れ、因果認識と結びついて、生成したのである。この世界的な事件は深く銘記せらるべきである。經濟學の誕生は恰もこの歴史的意識の生成と時を同じうしたのであり、この歴史的意識の眞づけによつて支へられてゐた。さうしてこの科學的發展は、一般に歴史的意識の轉換とともに、推移の跡を示してゐるのである。いま極く大づかみにその後の推移を述べるなら、非歴史的存在として根本的な非難を浴びた十八世紀の歴史觀とともに、古典經濟學も亦その同じ批判を蒙つた。それは歴史主義の歴史觀に據る陣營からであつた。けれども十八世紀の歴史觀の「指導理念」としての「進歩の理念」はフランス革命の試練を経てのち、再び

ブルジョアジーの手によつて一層有力に科學的に武裝せられた。本來ドイツ的形而上學的な特色を有つた歴史學派とならびその影響を一面には受けながら、西歐に於いては、啓蒙思想を直接に繼承したコンドルセやサン・シモンの思想的傳統の上に築かれたコント・ミルの社會學の中では、その動學の内に進歩思想は強靱な息吹きをつづけ、ダーウインの進化論の出現は、それに劃期的な一つの論據を與へ、新しい粧ひを可能ならしめたのであつた。ドイツに於ける形而上學的な有機體説に對して、西歐に於いては、生物學的な有機體説が經濟學を支配した。それは新古典學派に方法論的基礎を提供し、スペンサーおよびその後の社會學の發展に並行した經濟理論の動態論には、靜態に於ける「均衡」概念——これは「自然的秩序」の十九世紀的表現である——に相應じて、「運動」ないし「發展」概念——これは「自然的進歩」の同じく十九世紀的表現である——の内に進歩思想の名残りをとどめて、現代の理論經濟學の方法論的根據を提供してゐるのである。このやうに極く大ざつばな思潮の推移をのべるだけでも、經濟學と進歩主義的歴史觀との緊密な内的關係が略々想像するに足るであらう。

わたくしがヴォルテールの同時代者であり、重農學派の完成者であるとともにアンシャン・レヂームの最後の思想家であつたテュルゴの歴史觀の内から、その *die laetende Idee* を、すなはち「進歩の理念」を取り上げて、貧しい考察を加へたのは、經濟學に對して最も深き方法論的根據を提供するはずである歴史觀をはこの科學の誕生の時に於いて見さだめ、さうして經濟思想のその後の歴史的展開のペースペクティヴをとらへる觀點を獲得したいと云ふ意圖からであつた。ゆゑに我々のこの目的のためには、テュルゴの經濟理論と「進歩の理念」との關係に就いて筆を進めなければならぬのである。併しながら此企圖を遂げるまへに、彼の歴史觀のうち先稿に於いて觸れる餘裕を持たなかつた部分について、今一度筆を執ることが必要であると考へられる。本稿に於いて見

1) 摘稿「テュルゴの精神進歩の理論」(本誌昭和十六年十二月號)。  
および「テュルゴの社會進歩の理論」(本誌前月號)。

指されてゐるのは、先稿の補充をなしつつテュルゴの歴史觀の構造を全體として了解し、それが經濟學の構造に與へてゐる根本的な前提をば展望し、且つそれに加へて、その展望をたしかめるよすがともなると思はれる一つのこと論じ及ぶことである。

## 二

テュルゴの社會進歩の理論を取扱つた時、わたくしは環境をばできる限り時間的環境に限定しようとした。けれども、我々がヨーロッパ的社會類型と東洋的社會類型との比較論を述べた際に、國家の大いさの相違が社會進歩の有無を決定する一つの契機と考へられてゐる、と云ふことを知らねばならなかつたことによつても既にわかるやうに、テュルゴは世界史に影響を及ぼすところの地理的條件や、その影響を蒙りつつ展開せられ來つた世界史の空間的な擴がり——云はば世界史が行ぜられ來つた地上の舞臺——について、注目に値する考察を行つてゐるのである。「世界史は時と場所とのへだたりを測定する地理學と年代記とに基いてゐる」と彼は書いてゐる。この世界史の根柢となると共にまた世界史の展開によつて生成する世界史的空間に對するテュルゴの考察は、彼がソルボンヌにゐた時あるひはそこを去る少し以前に物したと推測せられる『政治地理學に関する著述のプラン』(Plan d'un ouvrage sur la Géographie politique)と云ふ覺書の内から最もよく汲みとることができるのである。そこでわたくしはこの空間的環境に關する彼の思想をそこに尋ねなければならぬ。

彼が「政治地理學」に於いて展開しようとして考へてゐた「一般的な理念」は、上記の覺書から取り上げると、次のやうなものである。それらにはもとより彫琢を経た表現が與へられてゐないけれど、この新しい學問の構想に立ち向つた若きテュルゴの苦心のあとを物語るものとして、ありのままを傳へることが、かへつて我々に有益ではな

1) 前掲拙稿「テュルゴの社會進歩の理論」(本誌前月號)。  
2) Œuvres de Turgot (par G. Schelle) Tom. I p. 277.

いかと思ふ。

「第一。自然地理と、地球上の諸民族の分布との、また諸國家の分布との關係。歴史的に考察せられた諸民族の分布の概観。國家の形成、諸國家の聯合について。(以下略)

「第二。貿易の均衡に關して、さまざまの地方のそれぞれの富や、諸地方が生産するさまざまな商品やこの多様性から生まれる通商の部門や、商品の流通——先づは地球一般の、あるひは風土と風土との、民族と民族との、地方と地方との——に關して考察された地理。

「第三。地上、海上、および河川による交通の容易さの大小に關して考察された地理。この交通の、征服や同盟や國家の個々の利益や國家が懷かせるであらう恐怖などに對する作用。交通の、商品の性質に應じて容積と重量とに大小の差があるために、輸送に難易があり、價格の差異がある様々の通商部門に及ぼすところの影響について。

「第四。さまざまの政治や、諸民族のさまざまの性格や、彼等の天才や彼等の勇氣や、彼等の勤勉などについて考察せられた地理。その中で道徳的原因に屬するものを分かつこと。自然的原因がそれにあづかつてゐるかどうか、またどのやうにしてかと思ふことを吟味すること。

「第五。すべてこれらの諸原理の結果と、その、王侯の利益や世界の諸部分のつながり(中略)などへの適用。この諸原理の内政への、主都の位置や州の區分や政治權力の各省への分割や取引の均衡や、(中略)海港・道路・集合點・主都・地方・裁判所・自治都市の政府、更には國家(Commune)の政府の建設などへの適用。また主都と地方と、都市と田舎と、地方とその内部の諸都市とのつり合ひへの適用。政治の性格と國家の大いさとの關係について。」

テュルゴが「政治地理學」と云ふ學問の中で展開しようとした理念はほゞかやうなものである。それは空間的環境と政治との交互作用を、すなはち空間的環境の人間のいとなみに對する限定と後者の前者に對する逆限定とを様々の側面に於いて探ねようとするものにほかならない。地理的環境決定論について批判的であつたテュルゴが自ら抱懷する理論をばそこで展開する意圖を有つてゐたことは、上引の第四項が示してゐる。さうしてテュルゴは空間的環境と人間のいとなみが先づ以て直接的に統一せられる生活部門を、經濟生活に見たのである。「もつ

3) cit. op. pp. 255, 256.

と一般的な區分をして、地理と政治との關係をば二つの題目の下に理解することができる。それは生産物の多様性と交通の容易さとである」と彼はつづいて書いてゐる。すなはち政治地理の根柢をなすものは經濟地理であると考へられてゐるのである。

またその直ぐあとで、次のやうな區分もできる、とテニルゴは書いてゐる。「政治地理に關する凡ての事柄をひとは二つの區分の下に整理することができる、すなはち理論地理學と歴史地理學。」この區分は政治地理と世界史との密接なる關係によつて生ずるものである。一般に地理は歴史と必然的な關係を有つ。何故なら、「土地は凡て人間の行動の舞臺である」からである。地理學は常に「現在の景觀」(Le tableau du présent)であるから、時とともに「絶えず變動する。」「さうして、凡て過去のもののかつては現在であつたのであるから、過去の物語であるところの歴史は、各瞬間毎につくられた世界史のかゝる景觀の系列であるのでなければならぬ。」かく政治地理を歴史と關聯せしめて論ずる學科が「歴史地理學」なのである。若し我々がこの學科の存在の意義を承認するとすれば、我々は彼の次の結論に同意しなくてはならないだらう。「政治地理は、敢へて云へば、歴史の斷面圖 (Le coupe de l'histoire) である。世界の斷面圖にかゝるは各地方の歴史を形づくるところの、その斷面圖の様々の系列の出來事がある。ちやうど根から頂きまで一本の樹を形づくつてゐる纖維と云ふものがあるやうに。それらの纖維は絶えずその中で變化する。さうして或る高さの各一點は、もしそこに截斷面 (section transversale) をつくるなら、樹の全體がこれらの多様な斷片の系列にほかならぬやうに、その高さに個有な姿を現すであらう。こゝに世界史と云ふものがある。各瞬間はある姿の政治地理を有つてゐる。さうしてこの名前は様々な系列の出來事の流れが必然的に終るところの現在の描寫には特にふさはしい。わたくしには、この問題に關聯して、政治地理と云ふ名稱が

4) cit. op. p. 257.

5) ibid.

世界史の一つの假裝(Adäquanz)であると云ふこともわかるのである。」

歴史地理學の主要命題となるこの結論について注意すべき事柄は二つあるであらう。その一つは、世界史が一本の樹になぞらへられてゐると云ふことである。世界史がある生物にあるひは人間の身體に比せられると云ふことは決して珍しいことではない。けれどもこのアナロギーから生ずる一つの歸結は、世界史の進歩の足跡が地球上に空間的に相並んで見られると云ふことである。それはちやうど植物が發芽し、枝を張り葉を繁らせ、美しい花をつけようと、根は根として、枝葉は枝葉として、花は花として、同時に存在するやうなものである。先に社會進歩の理論の分析にたづさはつた時に、狩獵民族・遊牧民族・農耕民族と云ふ風に進歩した人類が、進歩につれて以前の狀態に留まることを止めてしまふのではなく、アメリカに於いて、ペルーに於いて、未開な或狀態のままで、一層進歩した狀態とならんで存在すると云ふことに觸れたけれど、そのことはすなはちこの時間的な進歩がそのそれぞれの段階をば地球上に刻印し存續せしめておくことと云ふ歴史と生物とのこのアナロギーから生ずるものなのである。また類型的に考へられた東亞社會・土耳其社會・ヨーロッパ社會の比較も亦、進歩の缺如態を示す社會類型と自然的進歩を順調に遂げた社會類型との同時存在の理論によつて可能となるのでなければならぬ。第二に注意せらるべき事柄は、世界史の進行がそれぞれの時期の「截断面」としての「政治地理」を有つとするならば、世界史は時間的系列とともに空間的系列を有つことになると云ふことである。ある時代の「截断面」が世界史の足跡と考へられるならば、それはその時代の世界史の展開の空間的地平でなければならぬ。さうしてこの空間的地平が、テニルゴによつて「政治的世界圖」(La Mappemonde politique)と名づけられたものである。それは世界史の自然的進歩にあひ應じて、それぞれの時代の最も進歩的な社會を焦點として描かれる世界史の舞臺の上の

スポット・ライトの映寫面である。さうしてこの點から考へるならば、世界史は同時に「政治的世界圖」と云ふこの映寫面の發展系列として把握せられることになるであらう。テニルゴは世界史の觀客の前に展開せられるこのスポット・ライトの映寫面の發展系列を、前記の覺書の内に、未完成ながら、粗拙風に書きつけておいた。いまその要點を次に示さうと思ふ。

**第一次政治的世界圖。**ここでは地球上の人間の分布、生活方法——狩獵・遊牧・農耕——の變化とその發展を妨げた原因、民族性その他の成立などが論ぜらるべきである。

**第二次政治的世界圖。**ここでは「政治的社會」を形成するものとしての人間が考察せられる。自然が諸民族に與へた主要な制限とその制約の下に行はれそれを打開するところの交通手段が論ぜられ、それより發生する進歩の不平等、従つて野蠻と文明との様々なニュアンスが確認せられるとともに、征服による國家の形成の推移が見届けられる。すなはちここまででは世界史の序奏部分であつて、世界史を演ずる舞踏家は次の段階から舞臺に現れてくる。

**第三次政治的世界圖。**世界史のスポット・ライトの最初の映寫面は、テニルゴに於いては、決して一つではない。エヂプト・高地アジア・支那・フェニキア・初期のギリシヤと書かれてゐるやうに、それは五つのスポット・ライトのうちし出す世界史の景観である。そこではこれらの國家の内に行はれた交通や植民地との經緯やが論ぜられ、東洋に現れた知識によつて、しかし東洋に於ける專制政治によつてきつづけられずして、獲得せられた文明を持つところの、多くの勢力伯仲する國家群が展開せられる。すなはちこの世界圖は、多くの都市國家に分たれざるをえなかつたギリシヤの姿で結ばれるのである。

**第四次政治的世界圖。**アレクサンドルの征服とその後のギリシヤの國家、デンギス汗の征服に伴ふ支那人とヨーロッパ人との最初の接觸およびローマ人との接觸が、ここで見らるべきである。

**第五次政治的世界圖。**その後のギリシヤの政情から、ローマ人の普遍的な支配を経て、アウグストゥスの時代までがこの世界圖の範圍に屬してゐる。

**第六次政治的世界圖。**此世界圖はローマ帝國の下に於ける世界の狀態を包括する。ローマ帝國の政治の本質的な缺陷やその矯正手段が論評せられ、大國を維持する困難とその方法とが一般的に考察せられ、次いでローマ帝國の衰亡のあとが、ここで論ぜらるべきである。また世界宗教の要素が政治地理の中にはいつて來るのはコンスタンティン帝からのことに屬する、とここで



述べられ、宗教的寛容の必要が主張せられもする。さうして最後に、フランス王國がヨーロッパの城砦となつてヨーロッパの諸國家の建設に貢獻した事情がたしかめらるべきであつた。

第七次政治的世界圖。ユスティニアヌス帝の統治直前のヨーロッパの状態から、ゲルマン民族の勃興、彼等の征服と東洋人の侵入との差異などがこの世界圖の主要題目に屬してゐる。

テュルゴの粗描は以上の七つの政治的世界圖で終つてゐる。この世界史の截斷面の系列を見るとき、以下の事柄が注意せらるべきである。第一に、この系列は、裏返へされるなら、直ちに世界史の時代區分の系列である。歴史に於ける時間と空間との離すべからざる關係を、ひとは確認すべきであらう。第二に、テュルゴの政治的世界圖の構想が世界史の全體を通じて遂行されたとしたら、その最後の截斷面は、おそらく、ルキ王朝のフランスを焦點とし、その周邊に均衡を保ちつゝ並存する諸列強から成るヨーロッパ的「政治的世界圖」となつたであらうことを、ひとは推測することができよう。さうしてそれはアンシヤン・レヂームの支持者としての當時の彼に於いて、當然のことであつたであらう。すなはち、それは啓蒙期のヨーロッパが映し出される文字通りの *scènes* (尤または啓蒙なのである。この事は、テュルゴの進歩の理念を究めえた我々にとつて、自明のことからでなければならぬ。第三に、テュルゴのこの構想は、現在歴史を學び政治を論ずる者にとつて、極めて重要な教へを垂れてゐると云ふことである。たしかに彼の理論は時代的制限を有つてゐる。彼は、先稿に觸れておいたやうに、大発見の世界史的意義について、次のやうに述べた。「ポルトガル人は東洋に於いて、イスパニア人は西洋に於いて、新しい世界を發見した。世界は遂に知られたのである。(「Univers est chin commu.」)と。なるほど自然地理的には、その時「世界は遂に知られた」と云ひうるでもあらう。けれど、その世界は果たして、政治地理的にしたがつて歴史的に、眞に世界であつたと云ふことができるであらうか。それはヨーロッパ社會の *état* を地球の

舞臺できわ出たせるための薄明や暗黒をば、東洋社會や土古社會やアメリカの蠻地に振り當てることによつて成立した世界大の政治的世界圖であるにすぎない。従つてそれは世界の偶々までもが光に映えた眞の世界圖であるとは云ふことができないはずである。併しながらこの時代的制限があるにも拘らず、テニルゴの意圖は、その制限を越えて現代の意義を有つてゐるであらう。何故なら、眞實なる意味で「世界が遂に知られた」と云はれるのは彼の構想した時より約二百年の歴史を經過した現代に於いてこそ、であるのでなければならぬだらうから。現代の世界こそ、地球のあらゆる部分が世界戦争の坩堝の中で、光に映えて政治的世界圖を形成しつゝあると云ふことができる。そこでは世界史の舞臺に投ぜられるスポット・ライトはテニルゴの時代のやうに、ヨーロッパのそれだけではない。スポット・ライトは複數である。ロシアの光や東亞の光が、ヨーロッパやアメリカの光に加はりつゝ、多彩な色どりを以つて全世界を戰場として覆ひつゝある。その中から最も具體的な政治的世界像を掲げうる者のみが動亂の世界を新しい「政治的世界圖」のうちに安定せしめうるのである。之は現代に生きる人の實踐的課題でなければならぬ。このやうな意味に於いて、テニルゴの構想は現代生かさるべきであるのである。しかしそのためにはまた、過去の「政治的世界圖」についても、彼の視野を更に擴大して、スポット・ライトをヨーロッパのそれに限ることなくして、世界史を彩る多くの光源を見逃さないだけの用意を以て、改めて考へ直されねばならないであらう。それはともかく、かく考へれば、テニルゴの政治地理學の歴史との、従つて實踐との關係について、彼の時代的制限を越えた意義を認識せざるをえなくなるのである。従來の歴史哲學が空間の意義をば忘却し勝ちであると云はれるとすれば、テニルゴの政治地理學の卓見を再認識する必要に我々は、理論的にも實踐的にも、迫られてゐると云はなくてはならぬ。

8) 西谷助教授「國家觀と世界觀」を参照。

さてテュルゴの歴史觀から進歩の理念以外に残されてゐた重要な理論を取り上げて考察を遂げた我々は、彼の歴史觀全體に互つて見られる特色をば少しく論じようと思ふ。

年若きテュルゴの歴史哲學についての書き物は、彼の歴史觀を體系的に示してゐるのではない。けれども我々は「政治地理學に關す著述のプラン」の序論の末尾に於いて、彼の政治地理學の體系の骨組みを讀み取ることが出来る。そこには次のやうに書かれてゐる。「政治地理學と云ふやうな題目の下に問題を整理して次のやうにする方がよくはないだらうか。第一。合理的世界史(une histoire universelle raisonnée) 第二。その結果であらうところの政治地理。第三。私が政治地理の理論と稱するものを含むであらうところの政治理論(un traité de gouvernement)。<sup>1)</sup>我々がここで取り上げようとするのはこの政治地理學の體系の問題ではなく、その初めに置かれてゐる世界史に raisonnée と云ふ形容詞が加へられてゐると云ふ點に關してゐる。 raisonner された歴史とはいかなる意味を持つものなのであらうか。

歴史哲學に關する一般的な理解を有つてゐる人が直ちに聯想しうるやうに、「合理的歴史」とは、後にドイツ風に徹底せられてマイヒテによつて主張せられたところの「先天的なる歴史」(Geschichte a priori)に直接に連がるものであることを意味してゐる。それは個別的な歴史的事實そのものに深く沈潜してその中から歴史的生命みづからの論理として實を結ぶやうな歴史の理論であるのではなく、歴史の認識の主觀が合理的に思惟する場合に、かくあつたはずであると推論せられるところの歴史的發展の經過である。さうしてそれを賣いて時代を結ぶものは、同じく自然的理性の覺醒に伴つて漸次に展開されるはずである「自然的進歩」の一線である。云ひかへればこの世

1) Turgot, cit. op. p. 258.

2) 高坂正顯教授「歴史哲學」(岩波講座「倫理學」第六冊) p. 29以下參照。

界史は人間の理性の覺醒と平行して生起すべしと思惟される歴史の流れを辿ることによつて生ずるものなのである。とするならば、そこに二つの問題が生ずるであらう。その一つは、世界史のその認識主觀が理性や歴史の自然的進歩について語るとき、それ自らはいかなる歴史的な境位に立つてゐるのであるか、と云ふ問題である。それに對しては、その認識主觀が生きた現在に立つてゐる、と答へるより他はないはずである。すなはち認識主觀が置かれてゐる時代の理性の段階や進歩的狀態が基準となつて、そこまで到達して來た世界史の經過がたぐり寄せられるところに、この *raisonner* された歴史の本質があるのである。ドイツの歴史家、シュビットラーが云つたと云はれるやうに、「歴史とは現在の成立に關する科學である。」このことをテニルゴの場合について云ふならば、啓蒙の光に輝き、理性が最高度にまで研ぎすまされて、自然はもとより人事萬般が限なくその利器によつて認識せられると考へられたルキ十五世治下のフランスと、當時の列強の勢力均衡の狀態にあつたヨーロッパとが歴史認識の基準となつてゐて、それにまで到達される世界史の經緯が自然的進歩の一直線に貫かれたものとして、たぐり寄せられようとしたのである。その限りに於いて、この歴史觀の中には、*raisonner* された歴史の過程と實際の生起の流れとが對立してゐると云ふことができる。併しながらこの對立のままでは歴史とはならない。従つてこの兩者を結びつけようとする試みが、この歴史觀の内に、生じてこなければならなくなる。しからばこの試みはいかにして行はれたであらうか。

第一、*raisonner* にされた歴史の合理性が生起の流れを裁いて行く、と云ふ形で兩者が結びつけられる。フイヒテが「先天的歴史」に關して、哲學者が歴史を利用するのはもとよりただ歴史が彼の目的に役立つ限りに於いてであつて、それに役立つ他のすべてのものを無視するのである、と云つたと同じことが、ここに見られるであらう。

この歴史觀をビュエリが「時代錯誤主義的」と呼び、ディルトハイが「實用主義的」と名づけたのは此意味からである。また此歴史觀が人間中心的な樂天主義を根本的な特徴として持つと云ふことも、見易い道理である。それゆゑ、この歴史觀に於いて最も深い注意が拂はれるのは、啓蒙期に類似した時代であつた。テュルゴについて云ふなら、ギリシヤの最盛期(先の政治的世界圖の系列の第三)キリスト教がヨーロッパで確立した時期(政治的世界圖の第六)および「古代ギリシヤに於けるとよく似た事情に負ふてゐる」と云はれる文藝復興期であり、この最後の時代のイタリヤの如き状態が、彼にとつては、啓蒙期フランスの理想と考へられたことは、既にのべた通りである。かかる合理主義的・實用主義的な特色が、同じ歴史觀を懐いてゐたアダム・スミスの場合に、極めて著しいと云ふことは、周知の事實である。<sup>4)</sup>

第二に、しかし、兩者の結合は裁かれてゆく歴史的事實が、あくまでもその眞實なる事實性に於いて、認識されてゐるのでなければ、圓滿に行はれることはできない。すなはち歴史的事實に對する認識主觀の獨斷は避けられねばならないのである。ここに於いてか、テュルゴの場合には、合理主義的精神とならんで、實證主義的精神が據頭して来る。彼が「キリスト教の確立が人類に齎した利益について」のはじめに「私は唯々事實そのものをだけ根據とするであらう」と宣言したのは、歴史觀の獨斷性をば回避して世界史に客觀性を賦與しようとする意圖からであつた。このやうに、彼の歴史觀に於いては合理主義的精神と實證主義的精神とが相補ひつつ働いてゐるのである。併しながらこの二つの精神のうち上位を占めるものは合理主義的精神であつたと云ふことが、この歴史觀を特徴づけてゐるのである。テュルゴの精神を繼承した「實證主義」に於いても、この歴史認識の構造は變らないであらうけれど、今はそれに觸れるべき場所ではない。

4) Bury, The Idea of Progress p. 171 「ドルバツクの時代の大概の思想家は人類の過去の經歷を時代錯誤主義的に判斷する傾きがあつた。」 Dilthey, Ges. Sch. Bd. III S. 265.

5) 前掲拙稿(本誌前月號)pp. 7473.

合理主義的精神が實證主義的精神を覆うてゐるこの歴史觀に於いては、次の事態が生じて來るであらう。之が第二に取り上げらるべき問題である。歴史事實の實證性が重んぜられるとは云へ、それは個別的な事實をその個性に於いて認識するまでには至らないのである。合理主義的精神は事實の或程度の實證性を認識すれば、それで以て満足して、*raisonner*の對象として取り上げて了ふ。かくしてここに歴史事實はその個性に於いてでなく類型性に於いて歴史敘述に參與する。テュルゴの場合で云へば、進歩を齎す主體的條件は、その個性に於けるデカルトやニュートンではなく、凡人や單なる「發明の才幹」と區別せられるにとどまる「天才」であつた。またその客體的條件も、ヨーロッパの個々の社會ではなくしてヨーロッパ的な類型を有つた社會環境であり、それと對比せられた社會も或は東洋的或は土耳古的な社會類型であるにとどまつたのである。このやうに考へれば、*raisonner*された歴史は類型學的となると云ふ結論が生ずるのではないであらうか。

私はテュルゴの歴史觀が、認識主觀が生きてゐる「現在」から、それらにまで到達されるまで歴史的經過が辿られてゐるのである、と述べた。しかしこの「現在」は、一層嚴密には、いかなる内容を持つものであらうか。第三にこのことを問題として見よう。テュルゴにとつては「現在」は啓蒙期であつたに相違ない。アンシャン・レヂームの人間の精神や社會が歴史を編み出す出發點であつた。けれどもそれはその時あるがままの精神や社會であつたのではないであらう。「進歩の理念は未來との關聯に於いて始めて成り立つ。」恒にその完全へと進みゆく「人類の本質は、あるがままの姿に於いてよりはむしろありうる姿に於いて露になる。あるがままの人間は眞實には過去に屬するものであつて、完成へと進みゆく過程の中にあつても不完成であり、完成そのものではない。「進歩の理念」が據つて立つ「現在」はむしろ未來の完成を望んでゐる現在、あるひは未來の完成に直接につながつて

6) スミスに於いては、自然的進歩の鏡に照らすとき、歴史は human folly and injustice の産物と思はれたのであつた。  
7) 前掲本誌、昭和十六年十二月號拙稿 p. III.  
8) Bury, cit. op. p. 6-7.

る、現在である。この意味に於いて、テュルゴの歴史觀の基準となる「現在」とは實は未來的現在であり、その限りに於いて——樂天主義的であつたと云へ——實踐的現在であると云はれねばならない。従つてこの限りに於いては、この歴史觀は本質的に主體的であり、實踐的歴史觀であつたと云ふことができるであらう。この實踐的現在は構造的には當時「自然的秩序」と呼び慣らはされたものに他ならない。テュルゴがあるところで「理論に於いて取扱はれねばならないのは常に最もよきものである」と書いてゐるが、その「最もよきもの」とは實に「自然的秩序」だつたのである。さうしてこの理論に於ける「自然的秩序」がまた歴史に於ける「自然的進歩」の據り所となつてゐるのである。この兩つのは基本的な對概念であり、兩者の直接的な關係は、「精神科學の自然的體系」に於ける理論と歴史との直接的統一を可能ならしめてゐるものである。けれどもこのことに深く立入ることは今の問題ではない。ここではテュルゴの歴史觀に於いて、いな十八世紀の歴史觀を通じて、ある意味での實踐的現在が基準となつてゐること、従つてこの歴史觀は一種の實踐的歴史觀であつたと云ふことに、人々の注意を促したいと思ふのである。

上述の特色のゆゑに、この歴史觀は十九世紀に於いて「非歴史的」と云ふ痛烈な批判を蒙つた。それを貫く理性が歴史的ではなく、未來に直接つながる「現在」をば無媒介に過去にまで引き延ばして「現在」のみから歴史的事實を裁かうとしたからである。その結果、個性的な生起それ自體に對する關心がそこにはなく、せいぜい類型的なもので以て事實を眺め、各時代がそれぞれ個有的の意義を持つとは云はれなくなるからである。従つてまたこの實踐的性格とは非歴史的のゆゑに具體的に實踐的であるとは云はれなくなるのである。この批評は肯綮に價する。眞の歴史は十九世紀から始まると云はれる所以であらう。併しながら、上に指摘したこの歴史觀の實踐的性格は、

歴史主義からの批判にも拘らず、現在再認識して止揚的に活かさるべきではないであらうか、歴史主義の陥り勝ちな抽象は、却つて歴史觀の實踐的性格の忘却あるひは喪失と云ふことの内にありはしないか。歴史主義を廻る問題の重要な契機がここにあるのではないであらうか。私はこの點に於いて、啓蒙時代の歴史觀から汲み取つてよい營養素を見ないわけにはゆかないのである。さうして歴史主義から正當に理解されなかつた十八世紀の歴史觀のために、次に、オンケンがテュルゴについて行ふ批判に對して再検討を加へる必要を感じる次第である。

ルキ王朝の大藏大臣として活躍してゐた時、テュルゴはアンシャン・レヂームに最後の切開手術を施さうとして、王に國家組織の改革案を捧呈した。しかしそのために彼は遂に辭職せねばならなかつた。その改革案の内容は *Memorie sur municipalites* として現在見られるものである。そのはじめには次の如く書かれてゐる。「社會に於いて一致する人間の諸權利は人間の歴史に基くものではなくして、人間の自然に基くのである。理由なしにつくられた制度を不朽なものにするいはれはありえない」<sup>10)</sup>この言葉はたしかに極めて非歴史的いな反歴史的である。テュルゴが國家組織改良案を考案した時のこの反歴史的な立場は、青年時代に歴史哲學を編まうとした彼には似合はしからぬことであるとも考へられよう。オンケンはこの事を以てテュルゴの思想の「激變」と名づけ、次のやうにこの問題を解決した。「かかる激變は眞の獨創性に缺けるところあり、思想を外から汲み取りながら、後になつて受け容れたものをば、第二流の人物に特有な我執で以つて、閉め出してしまふやうな人にしてはじめて考へられることである。テュルゴは、實際には、之まで好意ある歴史敘述が彼に與へたやうな地位には値ひしなないのである」<sup>11)</sup>このやうな解決は、しかし、テュルゴに對して正當であるであらうか。私はさうは考へられない。むしろ後年の彼のこの言明こそ正に彼の歴史觀の自然主義的特色を傳へてゐるのであり、オンケンの批判は歴史

10) *Euvres de Turgot Tom. IV p. 575.*

11) *A. Oncken, Geschichte der Nationalökonomie Erster Teil S. 469.*



主義的偏見に災ひされてゐるのだといふべきであらう。

その理由は簡単に云へばかうである。先づ歴史觀の構造の上から云ふならば、テュルゴの歴史觀の據つて生ずる基準は「自然的秩序」であり、現實よりも一層完全なと考へられる絶對王制であつた。それゆゑ飽くまで合理的であらうとしたテュルゴが政治の中樞に立つた時に見いだした國家組織は不完全なものであり、政策的に向ふ時には、不完全なもの以上に、非理性的なものでなければならなかつた。政治が完全な國家組織の實現に向ふものである限り、一切の過去と絶縁した「自然的秩序」の實現に向つて合理的な政策を樹てるべきであつた。なぜなら合理的政策によつて自然的秩序は一層速かに實現される筈であるから。ゆゑにオンケンの所謂「激變はいささかの動搖でもなく、實は進歩主義的歴史觀の實踐的 성격によつて生ずる必然的な歸結であるに他ならなかつたのである。先に「自然的體系」に於いては理論と歴史とが直接につながることを指摘したけれど、一層正しくは歴史、理論および政策の間に直接的統一があつたと云ふことが、このことから理解されて來るであらう。此特性は「自然的體系」の方法論にとつて極めて重要な事柄に屬してゐる。次にテュルゴの提案の内容から見ても、オンケンの批判の不當が了解せられるのである。テュルゴの國家組織改革案は、一言にして云へば——詳しく云ふ餘白を有たぬのは遺憾である——當時の餘りに中央集權的な國家權力を分散せしめようとした點にあつた。すなはち、縣郡・村落および都市と云ふやうに階層的な政治組織を造つて、それぞれに國家權力の一部を分掌せしめ、その上に中央政府が臨むやうに、アンシャン・レヂームを改革することが企圖されたのであつた。そこでわたくしは人々に想ひ起こしていただきたいと思ふ、先にテュルゴが「模範的な政府」と呼んだものが、その條件として國家の各部分の間の秩序・各地方・各都市の地位の決定と自由の確立を有つと規定せられてゐたと云ふことを。さうす

れば彼の提案の内容は、彼が青年時代にのべた「模範的な政府」の實現に他ならない、と云ふことが甚だ明瞭に了解せられるのではないだらうか。オンケンの云ふやうな「激變」どころか、青年時代のテュルゴが大藏大臣としてかねての包負をここで實現しようとしてゐるに他ならない。この點から見ても、テュルゴの歴史哲學は終生微動だもせず、寧ろ自然主義的歴史が政策と直接に結びついてゐると云ふ好個の實例をば、我々はここに見いださなくてはならないのである。——要するに、オンケンの批判は不當である。それはむしろ歴史主義的歴史の、主體性を喪失した主觀による認識の、客觀性の要求の餘りに陥りがちであつた、非實踐的性格と云ふ抽象を自ら曝露してゐるのであると云はなくてはならない。さうしてテュルゴの悲劇の根據は、彼が第二流の歴史家であつたためではなく、進歩主義的歴史觀を懐きつつも——之はブルジョアジーの手でのみ有効に實踐と結びつくものであつた——尙ほアンシャン・レヂームの支持者として終生とどまつたと云ふ點にこそ求めらるべきである。

わたくしは、テュルゴの歴史觀が、そのまま再興すべきことを主張するのでは元よりない。ただここに見られる實踐的性格——それは實は抽象的なものでしかないけれど——が十九世紀の歴史觀によつて不當に看過され勝ちであると云ふことを、人々の注意を促したいと思つたのである。また經濟學の方法論から云つて、歴史哲學が大きな展望を可能にすると云ふことを、經濟學の外から示したかつたのである。従つてテュルゴの經濟學の内容にこの歴史觀がいかに作用してゐるか云ふことは、一切次の問題である。またこの歴史觀にひそむ人間中心的樂天主義は、世界史の現段階に危機を生ぜしめてゐるのであり、それとの對決は我々の重々な課題なのであるけれども、それについてもここに論及することはできなかつた。(二二六〇・二・四)